



第41号

さらしなの里



友の会だより

2019・秋



新本田阿弥陀堂



ご本尊の阿弥陀如来



羽尾の阿弥陀堂、装い新たに



旧本田阿弥陀堂



羽尾軍楽隊

令和元年、江戸時代安永年間（1777年頃）の建築といわれる古い歴史のある本田阿弥陀堂が生まれ変わりました。この阿弥陀堂の始まりは鎌倉時代（1270年）と伝えられています。現存文書の初見は元禄十年（1697年）松代藩の堂宮改め帳で、その規模は横二間・縦五間と記されています。今回取り壊された建物はそれより大きく、別棟の堂守の住居合わせて老朽化が進み現状維持が困難となり解体処分されました。

解体前に構造調査を行いました。周辺地域の信仰心の深さ、災害対策や時々の生活の痕跡に先人の厚い思いを強く感じることができました。国のあり方が大きく変わった明治時代の廃仏毀釈にも阿弥陀信仰は変わらず、昭和には地域のコミュニティ施設として、羽尾四区の公会所としても利用されました。

今回の新築にあたっては地元の本田三組の皆様をはじめ、区内外の多くの皆様のご支援をいただきました。新阿弥陀堂は本尊の阿弥陀如来を安置し、日々間近で阿弥陀様と接する事が出来る配置となっています。あわせて明治時代に結成され大頭祭の名物である「羽尾軍楽隊」の資材置き場も併設され歴史のある貴重な機材も安全に管理されます。場所は資料館入口に設置されている「さらしなの里名所めぐりコース」の明徳寺から瘡守稻荷神社の間にあり、昔をしのぶ石造物もいくつかありますので、ウォーキングの途中立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

（羽尾四区・北村主計）



平安時代に書かれ、だれもがその名を学校で教えらるる「更級日記」は当地の地名を題名にしています。作者は当地に来たことは一度もないのに更級日記であるのはなぜなのか。NHKの人気番組「歴史秘話ヒストリア」が6月、その理由を紹介する番組を放送しました。

「物語に魅せられて 更級日記・平安少女の秘密」というタイトルにあるように、作者は少女の時から物語が大好きだった貴族女性。当時から大変話題に

NHK人気歴史番組に冠着山が登場

なっていた「源氏物語」に登場する女性にあこがれ、そのように生きたいと願うなど大人になっても夢見がちでした。そんな女性が晩年、そうした越し方をふり返っているのが更級日記なのですが、老いた自分の身を嫉捨山（冠着山）に引きつけた和歌を最終盤に載せています。それが日記のタイトルに更級がついた理由です。嫉捨山はさらしなの里のシンボルであることが平安時代から都の人たちに知られていたことを示す証拠です。

「歴史秘話ヒストリア」は、歴史好きな女性「歴史」が話題になったところに放送が始まり、ともすれば固く難しい内容になりがちな歴史を最新の研究成果を踏まえ、大胆に感情移入しやすいように作られています。更級日記を取り上げた今回の番組では番組終盤、千曲川川東の千曲市小船山区の方から見晴らすように冠着山を写し、この地が「さらしな」という地名だったから「更級日記」となったことを紹介しています。

この番組をきっかけに更級日記とさらしなの里、そのシンボルである冠着山への関心が高まりそうです。番組はNHKオンデマンド（有料）で来年6月まで見ることが出来ます。（芝原区・大谷善邦）

リレイ
里麗エッセイ

終活の中で見た宝

鋳物師屋 宮坂岩子

いつの間にか終活を始める年になりました。義母から生前、自筆で「わたしのまごころを、おくります」という一筆箋をいただきました。この言葉を忘れることの方が多かったのですが、ふと思いつき我が身を振りかえる大切な宝となってきました。

もう一つの宝物、それは更級の子と作った歴史カルタです。26年前のカラーの原版です。更級に子どもたちがぞっこん惚れ込み、また支えてくださった人々の匂いも残っているカルタ

です。なんどかの終活の思いの中で、喜寿を迎えるこの辺りで手放そうと心を決めました。校長先生お話し、快く受けてくださることになりました。昨年の秋、懐かしい更級小へ行きまし。校舎は新しく、でも木、土、村の匂いは変わっていませんでした。

校長先生とお話していた時、かわいい1年生が遊ぼうと校長室へ入ってきました。そして机上にあるカルタを見て、「ぼくの家にもあるよ。お父さんが持っているから知っている。お父さんの名前は〇〇」と言うのです。なんとこのカルタを作った本人だったのです。

私は思わずかわいい1年生をぎゅっと抱きしめてしまいました。4年生のとき作った自分のカルタを我が子に見せていたんだなと思えたのです。歴史が心が学びがつながっているって、こういうことなんだなと実感したので。

終活の中で宝がまた別の宝になっっていくこともあるんだなと思えました。こんな宝をいただいた更級にありがとうという気持ちでいっぱいです。



子どもたちの手で生まれた「棚田姫物語」

「棚田姫のお話って図書館にありませんか？」

ある日、卒業を控えた一人の児童が図書館を訪ねてきた。その児童こそ、絵本「棚田姫物語」の作者その人である。

「棚田姫」とは、本校音楽会の全校合唱で、平成27年度から歌っている曲である。作曲者は、姨捨の長楽寺でのライブでも千曲市と交流のある吉川忠英さん。吉川さんは、毎年、本校にもおいでくださり、子ども

と一緒に「棚田姫」を歌ってくださっている。

「棚田姫」は、民話や伝説などがあつたわけではないので、そのことを伝えた。すると、「実は今、棚田姫のお話を作っています」という意外な一言が返ってきた。聞けば、自主学習ノートを使って既に話を書き進めているという。「出来上がったから見せてほしい」と話した。数日後、書きあがった

ノートを見せてもらった。主人公は棚田城のお姫様、芽生。お姫様は棚田を愛する青年、佐助と恋に落ちる。しかし、佐助はお殿様から米の不作の元凶とみなされ刑に処されることになる。そのときお姫様は…。

物語から、作者自身が棚田を大切に思う気持ちが伝わってきた。とても感動する内容だったので、絵本にして多くの人に読んでほしい、更級小学校の後輩たちに残してほしい、「棚田姫」作曲者の吉川忠英さんにも届けたいと思った。

そこで、「絵の得意な友達に挿絵



を描いてもらって絵本にしよう」と提案した。幸い仲良しの友達が、絵が得意だという。絵本制作の話をしたところ、協力してくれることになり、「棚田姫物語」の絵本制作がスタートした。表紙・裏表紙も含め13枚の挿絵も、全て二人で描いた。挿絵の配置も細かく決められており、二人のこの本に寄せる熱い想いが感じ取れた。

出来上がった原稿をもらい、製本作業に入った。これは更級小学校の大切な宝物の一つになると確信した。出来上がった絵本を、作者一人と担任の先生、作曲者の吉川忠英さんにもプレゼントした(写真上)。図書館入り口にもコーナー(写真右)を設けて数冊置いた。感想用紙も添えたところ、読んだ児童から少しずつ感想が届いている。「棚田姫物語」は、一人の自主学習から始まった、素晴らしい卒業制作となった。

(更級小学校 瀧澤ひろ美)

道 験 修 着 冠 った え み よ



江戸時代までは、修験者（山伏）はとても身近な存在でした。修験道は山での修行で得た知恵と験力を里の庶民のために役立てることが本分であるとされておられ、修行の中に「里の行」というものがありました。里人の願いごとに応じた加持祈祷、生薬の提供、厄払い、雨乞い、神通力を持つて行う占いと心の病の治療などです。里人にとっては医者であり賢者であり願いをかなえ

11月2日に体験イベント

てくれる救世主のような存在であつたとつた思われます。

ところが残念なことに、明治新政府による神仏分離令と修験道廃止令によって弾圧され、権現信仰と修験道は壊滅状態にさせられてしまいました。冠着山の修験道も例外ではありませんでした。冠着山は、祖霊神、月読命、大

たと伝えられています。

また、明徳寺と智識寺は山号を冠着山と号していた時代があり、戸隠神社を祭神として祀っていた事もあつたそうです。安養寺には今でも戸隠神社と深いつながりのある飯縄神社が別当寺として祀られています。坊城平、坊の平、堂平などの修験道場であつ

た証しとなる地名も冠着山周辺にはたくさんあります。

戦後の新しい憲法のもとで信教の自由が保障され、修験道は全国各地で見事に復活を遂げました。冠着山の修験道も古き良き伝統文化を復活させたいという市民団体によって4年前によりみがえらせました。

国主命、石尊大権現、冠着峰児権現、そして地元の六社が祀られている霊山です。この霊山が修験道場となった時期は定かではありませんが、木曾義仲が八幡神社に祈願文をささげた時、冠着山峰児権現となえているので、このころすでに峰児権現が冠着山に祀られていて修験道が行われていたものと推定されます。その後戸隠山の前山道場（戸隠山に入山する前に必ず詣でる）として位置付けられました。当時冠着山の山腹にあつた明徳寺、知識寺、安養寺は修験者の拠り所であつ

「仏教を父に神道を母として仲の良い夫婦から生まれたのが修験道である」と冠着山修験道復活に尽力された修験道の聖地・吉野金峯山寺修験本宗元宗務総長の田中利典氏が述べています。修験道は、仏教と神道の他に中国から伝わってきた道教や陰陽道の要素も加わって確立し、やがて、日本の風土に最も合致した修行として日本全国に広まってきました。国土の七割以上を山が占めている日本では、古来から

山を崇拜し山に対する怖れと畏敬の念を抱き山の霊的な力を信じてきたのです。

山の大好きな日本人のルーツは修験道の世界にあると言つても過言ではありません。物があふれかえり高度に情報化された社会にあつて、ストレスにさいなまれ心身のバランスを失いがちな現代人にとって、ホラ貝が鳴りわたる中、「ぎーんげざんげ、ろっこんしょうじょう」と大声を張り上げながら行う山伏修行は、きつと自分の中に新しい自分を発見する大きなきっかけとなるでしょう。

今年も11月2日に実施されます。登拝という山登りが主で、途中法楽という行事や頂上での護摩法要もあります。体験イベントですので苦行はありません。どうか気楽にお誘い合つてご参加ください。（冠着山の自然と文化遺産を保存する会事務局長・上水清 〓 羽尾五区）

編集後記 本田阿弥陀堂と地域との歴史的な関係については北村さんが23号（2010年秋）でもお書きになっていたのでお読みください▽更級小の子どもたちにもつわる二つのエピソード、心が温まります▽修験体験は冠着山の魅力再発見です。